

や ま たい みやこ
邪馬台の都

加羅古呂庵 一泉

邪馬台の都

『魏志』倭人伝に記された倭国は、2世紀後半に国々が争い乱れたため、巫女卑弥呼を王として立て、この女王国（邪馬台国）が約30の国を統率する連合国家であったそうです。当時の中国からすれば、倭国は当方の発展途上国であったはずですが、『魏志』倭人伝では、やや羨望をもって眺めていた部分も見受けられます。邪馬台国の所在はともかくとして、当時の倭国のすがたを想像して、「大海の彼方」「温暖の地」「女王の宮室」「酒好き長寿」「邪馬台の都」「繁栄と陰り」の6つの部分から構成してみました。

『魏志』倭人伝の記述は、朝鮮半島経由の倭国への行き方から始まります。「倭人は帯方の東南大海の中に住み、山島をもって国邑をつくる」とあります。

その地は温暖で、夏も冬も野菜が穫れ、また、真珠や青玉を産し、種々の植生や動物が描かれています。

卑弥呼は「鬼道につかえ、よく衆をまどわせる」とあり、弟がこれを支え、国を治めていました。婢千人を侍らせ、宮室・楼観・城柵は兵器を持つ者によって守られていたようです。

人々は酒好きで、しかも80、90、あるいは百歳もの長生きだったとか。

7万余戸の集落に、倉庫や邸宅、商店などが建ち並び、市には人々が集まり、国々の間で貿易も行われていました。

女王国連合は繁栄の一方で、狗奴国と対立し、卑弥呼の死（247年？）が一つの時代を区切ります。

参考文献：『新訂 魏志倭人伝・後漢書倭伝・宋書倭国伝・隋書倭国伝』（石原道博編訳 岩波文庫）

※縦譜につきましては、当該楽器のほかに他の楽器のパートを補助的に記載しています。ただし、複数のパートを集約し、オクターブも変えているところがあります。また、十七絃は箏に置き換えて記載しています。正確には、五線譜（スコア）をご参照ください。

加羅古呂庵ホームページ



The musical score is arranged vertically for six instruments: 尺八I, 尺八II, 三味線, 箏I, 箏II, and 十七絃. Each instrument part is on a five-line staff. The 尺八 parts are in 1尺8寸管 (18-inch scale) with a key signature of one flat and a common time signature. The 三味線 part is in 二上がり (2-up) tuning. The 箏 and 十七絃 parts are in 花雲調子 (Hanagumi) tuning, with a key signature of one flat and a common time signature. The 箏 parts include the text '花雲調子 途中四・六・九・斗 調弦替えあり' (Hanagumi tuning, middle section 4・6・9・do, retuning change available). The 十七絃 part includes the text '花雲調子 途中四・六・九・斗 調弦替えあり' (Hanagumi tuning, middle section 4・6・9・do, retuning change available). The lyrics '斗 為 巾' (do mi kin) are written below the notes in the 箏 and 十七絃 parts.

運指、奏法については、適宜工夫していただいでけっこうです。